
大腸がん検診

大腸がん検診（便潜血反応検査）の実施成績

東京都予防医学協会検診検査部

はじめに

東京都予防医学協会（以下、本会）では、1986（昭和61）年より便潜血検査による大腸がん検診を実施している。そして、1次検査で陽性となった精密検査対象者には大腸がん追跡調査用紙を配布し、受診した提携先医療機関またはそれ以外の医療機関より精密検査の結果を返信していただくという、追跡調査システムを実施している。なお本システムの対象者は職域検診、地域検診、人間ドックの受診者である。

便潜血検査は、抗ヒトヘモグロビン・マウスモノクロナール抗体を利用した金コロイド凝集反応で便中のヘモグロビンを測定する免疫比色法（和光純薬社）により、大腸内の出血の有無を調べる方法である。

1日のみ採便する1日法と2日間採便する2日法が

あり、検査委託団体や健康保険組合との契約により異なる。また、検体は基本的には検診時に回収しているが、10月中旬～2月に実施する一部の事業所では郵送による回収も行っている。

本稿では、2016（平成28）年度の大腸がん検診の実施成績と結果について報告する。

受診者数と年齢分布

大腸がん検診総受診者数は男性29,605人、女性20,653人の計50,258人で、男女比は1.43：1と男性が多くなっている。男性比率を検診別にみると、職域検診では62.0%、人間ドックでは66.9%であるのに対し、地域検診では逆に女性が74.9%と多い傾向を示した。検診区分としては職域検診が38,300人（76.2%）、

表1 検診区分別・年齢別分布

検診区分	性別	年 齢 区 分							総計	男女比率 (%)
		～29歳	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80歳～		
職域	男性	383	3,000	7,864	7,671	4,048	619	144	23,729	(62.0)
	女性	368	2,105	5,867	4,259	1,579	330	63	14,571	(38.0)
	合計 (%)	751 (2.0)	5,105 (13.3)	13,731 (35.9)	11,930 (31.1)	5,627 (14.7)	949 (2.5)	207 (0.5)	38,300 (76.2)	
地域	男性		29	321	256	333	239	92	1,270	(25.1)
	女性		124	1,396	855	870	479	74	3,798	(74.9)
	合計 (%)		153 (3.0)	1,717 (33.9)	1,111 (21.9)	1,203 (23.7)	718 (14.2)	166 (3.3)	5,068 (10.1)	
ドック	男性	4	733	1,568	1,439	730	116	16	4,606	(66.9)
	女性	13	380	855	694	282	55	5	2,284	(33.1)
	合計 (%)	17 (0.2)	1,113 (16.2)	2,423 (35.2)	2,133 (31.0)	1,012 (14.7)	171 (2.5)	21 (0.3)	6,890 (13.7)	
全体	男性	387	3,762	9,753	9,366	5,111	974	252	29,605	(58.9)
	女性	381	2,609	8,118	5,808	2,731	864	142	20,653	(41.1)
	合計 (%)	768 (1.5)	6,371 (12.7)	17,871 (35.6)	15,174 (30.2)	7,842 (15.6)	1,838 (3.7)	394 (0.8)	50,258	

地域検診は5,068人(10.1%)、人間ドックは6,890人(13.7%)であった。

受診者数の年齢分布は、いずれの検診区分においても男女とも40～49歳が最も多く、次いで多いのは職域検診と人間ドックでは50～59歳で、地域検診では60～69歳・50～59歳がほぼ同数であった(表1)。

受診者数の推移

検診区分別受診者数の推移を示した(図)。前年度と比較すると、受診者数が全体で8,055人(19.1%)増加した。

検診結果

職域検診での便潜血検査の要精検者数は2,576人、要精検率は6.73%で、精検受診者数は488人、精検受診率は18.9%であった。大腸がん発見率は0.039%(男性11人、女性4人)で、陽性反応適中度は0.58%であった。

地域検診での便潜血検査の要精検者数は344人、要精検率は6.79%で、精検受診者数は157人、精検受診率は45.6%であった。大腸がん発見率は0.059%(女性3人)で、陽性反応適中度は0.87%であった。

人間ドックでの便潜血検査の要精検者数は473

人、要精検率は6.87%で、精検受診者は100人、精検受診率は21.1%であった。大腸がん発見率は0.058%(男性4人)で、陽性反応適中度は0.85%であった。

精検受診者745人の精検結果の内訳は、大腸がん以外では大腸ポリープが最も多く、次いで痔核、大腸憩室症、炎症性腸疾患の順であった。その他としては粘膜下腫瘍、非特異性腸炎などがあった(表2)。

発見された大腸がんの特徴

2016年度に発見された大腸がんは22人で、内訳

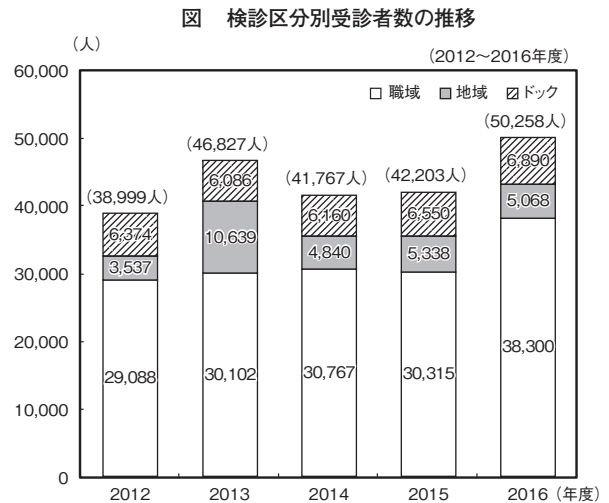


表2 検診結果

検診区分	性別	総受診者数	1次検診結果		精検受診者数	精検未把握者数	精密検査診断結果							大腸がん陽性反応適中度
			異常なし	要精検			大腸ポリープ	大腸憩室症	炎症性腸疾患	痔核	異常なし	その他	大腸がん	
職域	男性	23,729	22,033	1,696	325	1,317	160	19	13	23	90	9	11	
	女性	14,571	13,691	880	163	663	53	8	4	12	79	3	4	
	合計	38,300	35,724	2,576	488	1,980	213	27	17	35	169	12	15	
	(%)		(93.27)	(6.73)	(18.9)	(76.9)							(0.039)	(0.58)
地域	男性	1,270	1,168	102	38	44	28		2	3	5			
	女性	3,798	3,556	242	119	142	51	3	2	11	45	4	3	
	合計	5,068	4,724	344	157	186	79	3	4	14	50	4	3	
	(%)		(93.21)	(6.79)	(45.6)	(54.1)							(0.059)	(0.87)
ドック	男性	4,606	4,276	330	63	241	35	3		1	19	1	4	
	女性	2,284	2,138	143	37	74	12	1	1	1	22			
	合計	6,890	6,414	473	100	315	47	4	1	2	41	1	4	
	(%)		(93.09)	(6.87)	(21.1)	(66.6)							(0.058)	(0.85)
総計	男性	29,605	27,477	2,128	426	1,602	223	22	15	27	114	10	15	
	女性	20,653	19,385	1,265	319	879	116	12	7	24	146	7	7	
	合計	50,258	46,862	3,393	745	2,481	339	34	22	51	260	17	22	
	(%)		(93.24)	(6.75)	(22.0)	(73.1)							(0.044)	(0.65)

は男性15人、女性7人で、男女比は2.1:1であった。早期がんは20人(90.9%)、進行がんは2人(9.1%)であった(表3)。

(文責 齊藤友良, 小野良樹)

大腸がん検診のまとめ

本会における2016年度の大腸がん検診受診者数は50,258人と、前年度より19.1%増加し、直近の5年間では最多となった。

また、要精検率も6.75%と許容値(7%以下)をクリアすることができたが、一方で精検受診率は22.0%と依然として極めて低率(許容値70%以上)で、精検受診者数も745人と、前年度より189人減少した。

本会では、大腸がん検診を実施する上での大きな課題となっている精検受診率の向上を目的に2015年4月に全大腸内視鏡検査(TCS)をスタートさせたが、上記のように現時点ではその成果はまだ見えてきていない。

本会でのTCSの実施環境は、検査担当医、スタッフ、設備のどれを取っても大腸がん検診精検実施施設の中ではトップレベルにあり、本会における2016年度の大腸がん検診要精検者3,393人の約半数を処理する能力を備えている。すなわち、精検受診率を改善させるには、要精検者に本会でTCSを受けてもらえばよいだけなのであるが、現実はその簡単にはいかない。本会でTCSを受けてもらう人数を増やすには、対象者への徹底的な勧奨が最も有効な打開策で

表3 発見がんの特徴

	(2016年度)	
	早期がん(人)	進行がん(人)
発見数	20	2
(組織型別)		
腺がん	20	2
(肉眼分類別)		
I p	3	
I s p	5	
I s	3	
0- I p		
0- I s p		
0- I s		
I s+ II c		
II a	1	
0- II	1	
1型		1
2型		1
不明	7	
(深達度別)		
M	7	
SM	2	1
MP		1
不明	11	
(病期別)		
0期	6	
I期	1	2
II期		
III a期		
不明	13	

はあるが、それには本会における大腸がん検診の実施プロセスにもメスを入れることが必要となる。

わが国でも有数の大腸がん1次検診実施施設である本会で、TCSによる精検受診率を高率に保つことができれば、わが国における大腸がん検診のモデル施設にもなり得るだろう。そのためにも、ぜひ貴重な一歩を踏み込んでもらいたい。

(文責 松島クリニック 鈴木康元)